【4】 実践事例

―― 授業づくり ――

〔1〕 生活単元学習

(1) 基本的な考え方

生活単元学習は、毎日の生活の中で子どもたちが経験する諸活動、つまり生活そのものを学習の中心として、身辺自立等の諸問題と取り組み、広く表現する力を身につけていこうとするものである。生活単元学習はコミュニケーションの向上にとって次のような意味を持っている。

① 子どもたちにとって話しやすい場である。

・子ども、指導者、補助的指導者のコミュニケーションを前提としている。

・担任や友だちとの共感関係に支えられており、子どもたちは、自分の思いを安心して表現できる

・言葉を投げかけ（発問）、それに対する子どもたちの反応（言葉、声、表情等すべての表現）を受け取り、また子どもたちに返していくやりとりを、パターン化して繰り返すことで子どもたちは見通しを持って意欲的に反応できるようになる。

・指導者と補助的指導者がコミュニケーションのモデルとなり得る。

② 子どもたちにとって楽しめる活動が展開する場である。

・教材の選定や教具の作成においては、何より子どもたちが楽しんで意欲的に取り組めることを大切にし、「遊び活動」や「みたて・つもり活動」を取り入れ、子どもたちの自主的な活動を促すことができる。

③ 豊かな経験を繰り返す場である

・子どもの持っている経験の豊かさがその子の表現する力や手法を決定づける要因となることから経験の乏しい子どもたちに豊かな経験を意図して与えると同時に、それを繰り返すことによって表現方法を学習させ、生活を通して育てていける場である。

・単元内、単元間そして毎年の繰り返しと積み上げを大切にしている。

④ 個別の目標設定及び指導の重点を基に指導実践し、またそれを評価していく場である

・全体学習の中でも個を生かす指導を工夫し、常にその子の課題を意識しながら指導すると共に、個別指導で高められていったコミュニケーションの技能や意欲が、全体学習の中でどう生かされているかを評価していく場である。

以上の点で、コミュニケーションの指導の場として重要であると考える。

(2) 今年度の指導方針

・豊富な経験を遊びや具体的活動を通して与えていくことで**生活経験の拡大**を図る。

・先生や友だちと学習する中で、自分の言葉や思いが相手に通じる喜びや良さを味わったり、やりとりの楽しさを味わうことで、**共感関係の深まり**を図ることができる。そのため、形式的な学習の流れにとらわれず、自由な発言や表現の出やすい雰囲気作りを心がける。

・生活行動に必要な**基礎能力**や**認知概念**の形成を図る。そのため、スモールステップの原則をふみ

ながら、その子の今の課題を常に念頭に置いて指導する。

・学習の中に遊びを取り入れみたて・つもり活動の充実を図る。

(3) 生活単元学習の概要

学校行事に向けて、あるいは学部行事を設定しての事前学習や事後学習が中心となって展開されることがほとんどである。その中で、合同学習とクラス学習を有機的にからめたり、遊びの時間や各教科、領域とのつながりや発展を大切にしながら進めている。以下の表は合同学習を中心とした実践の概要を示したものである。

単元	単元の概要と主な題材
新入生を迎える会	新入生３名を迎え小学部の子どもたちと保護者が一同に会し、ゲーム等を楽しみながら、互いに仲良くなる会として設定した。在校生の出し物として「なかよし森の小人たち」を発表した。 ○台詞遊び　○自己紹介　○ダンス　○名札作り
子どもの日を祝う会	○ちまき作り　○こいのぼり作り ○すもう
たなばた発表会	七夕祭りと共に１学期の成果を発表する会である。各クラス単位で劇を発表したり、いすとりゲームや歌遊びをして楽しんだ。 ○いすとりゲーム　○ダンス・歌 ○七夕飾り作り　○劇遊び
運動会	９月１７日の運動会に向けて種目練習の他に、種目に使う道具を作成した。 ○道具作り（かき・おにぎり）　○置き換えリレー
学習発表会	昔話「さるかに合戦」をアレンジし、台詞や粗筋を工夫して小学部版「さるかにがっせん」の劇を発表した。前単元や他教科での学習を生かし、背景画や大道具、小道具を作る学習も入れ込みながら練習を積み上げ、当日は、ステージいっぱいに子どもたちの個性が光る演技が展開された。また音楽の発表では、一人ずつが音楽家になるという設定で得意な楽器を披露した。 ○劇遊び　○大道具、小道具作り　○背景画作り ○歌・ダンス　○合奏（タンブリン・ピアニカ・大鼓） ○招待状作り

新入生を迎える会
「自己紹介」

たなばた発表会
短冊に願いをこめて

学習発表会
「さるかにがっせん」

(4) 実　践　例

ゲームや遊びを取り入れ、楽しんで表現活動に取り組んだ実践　単元　たなばた発表会

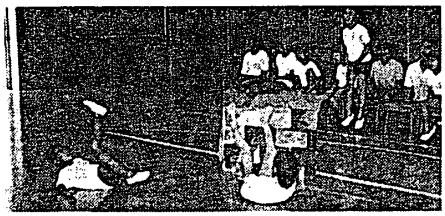
① 単元設定の理由

小学部では、短冊に願いごとを書いて笹の葉に飾る日本古来の七夕祭りと１学期の成果発表とをかねてたなば発表会を開催することが恒例となっている。本年度は、各クラスの出し物の他に合同音楽で学習した歌や手遊び・劇遊びの発表と、なかよしタイム等で慣れ親しんできたいすとりゲームをすることにした。子どもたちが両親や先生方が見に来てくださることを支えに発表の練習に取り組む中で、身体的・言語的表現活動の素地が養えると考えた。また、先生や友だちと協力し合い、一緒に活動する喜びをもつこともできると考えた。

② 単元とコミュニケーションとの関わり

子どもたちが興味関心を持ち、楽しんで意欲的に取り組む中からコミュニケーションの力が育つという考えから、技能に直接迫るというより意欲を支えにしながら、表現の基礎となる能力や態度を養っていこうとした。劇遊び「まがり角」では怒りの気持ちを言葉や動作で表現したり、いすとりゲームでは、「笛の合図で早く座る」という簡単なルールから「鬼の言う言葉を聞いて条件に合う人が移動して座る」といった難しいルールへと移行させ、少しずつ言葉の意味やルールを理解させながら、先生や友だちと楽しくゲームすることをねらいとした。

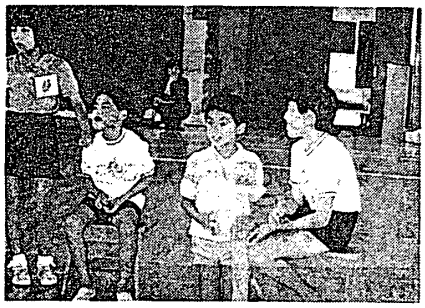
③ １時間の学習の展開

学習活動	個への配慮と手だて	児童の様子
・楽しく歌をうたいながら全員の集合を待つ。 1．たなばた発表会について確認する。 （日づけ　内容） 2．合同発表の練習をする。 ・まがり角 ・おはなし指さんの劇遊びと歌 3．いすとりゲームをする。 ・「赤」「黄色」「緑」「フルーツバスケット」の条件でする。	・たなばたに関する歌をうたい、ムードを盛り上げる。 「おほしさま」「たなばたさま」 1．子どもたちに問いかけ、自由なつぶやきや反応を大切にしながら進める。がんばり表を見ながら、活動への見通しと意欲を持たせる。 2．怒っているところの台詞はその子なりの自由な表現を大切にする。これまでの子どもの表現（言葉・動作）を記録しておき、子どもが学習に集中できない時には指導者の方がモデルを示して表現しやすくする。 ◎目　標 0段階　みんなと一緒にいる 1段階　身振りで表現する 2段階　声に出して言う 3段階　大きな声で言う 4段階　感情をこめて大声で言う 3．色が言えない児童や色と言葉がうまく認識できない児童のために色カードを使う。鬼の声が小さい時は皆で言い直しをする。教師も歓声を上げたり残念そうな声を上げたりしながら雰囲気を作り、子どもたちと共感する。ぼんやりしている	・教室でも繰り返し歌っているので、教師の手の動きを真似ながら楽しそうに声を出している。 ・「7月3日」とO男。教師はN男を指名、はっきりと言える。O子も小さい声ながら言う。K男は日にちカレンダーを指さす。がんばり表のシールを声を出して教えるK男。 ・感情を込めて言えたM子とO男。「メッ」と一声ながらはっきりした声が出せたU男。「こらー」と大きな声と動作ができたA男。それぞれが自分なりの表現をしている。  「そこーで二人はぶんぶんぶん」 ・「天国と地獄」の音楽がかかった途端走り出したH子、いすの回りをぐるぐると走っているのでいすの周りに大きな渦ができた。進んで鬼になったT男は不明瞭ながらも大きな声で「黄色」と言えた。

・「赤と黄い」など2つの条件を入れてみる。 4．本時の取り組みの評価をし、本時のまとめとする。	児童には声かけや少しの援助をする。 ◎目　標 A　先生に言われて動く B　時々補助を受けながら動く C　自分で判断して動く D　勝ちたいという気持ちで早く動く 4．本時の学習についての感想を児童に言わせる。自発的な発表を待つが、言えそうな児童には教師の方から問いかける。がんばり表にシールを貼り、本時のがんばりを認めると共に、発表会への期待感を高める。	・N男は鬼になった時、「しまった」という表情で床に倒れて見せ、周囲の笑顔を誘った。赤のカードを上げながら「緑」と言ったが、もう一度カードを見て正しく言い直した。 ・O男は同じクラスのN男に、いすを指示し、手を添えて座らせていた。D段階のO男は自分自身楽しみながら、友だちへの気配りもしている様子が見られた。 ・がんばり表にはゲームで勝ち残ったK男がシールを貼った。シールが増えたこと、あと2回練習することなどを皆で確認した。

④ 考　察

クラスとしてのまとまりがようやくでき始めた時期の合同単元である。クラスで練習し、その成果を合同の場で発表し、そこで得た自信や意欲をさらにクラスの練習に生かすという一連の流れを大切にしていったため、小学部としての一体感も徐々に高まり友だち同志の関わりも少しずつ拡がっていったように思う。発表会当日は、1年生から6年生までが家の人が見守る中、生き生きとした表情で発表やゲームに熱中する姿が見られた。また単元終了後、友だちとのトラブルがあった時これまでだと黙ってしまうか手を出すしなかったY男やT男が、「おこってる」「ぷんぷん」等の言葉で怒りを表現する場面が見られ、言葉遊びからの確かな発展があった。湖山西小学校とのなかよし交流でいすとりゲームをし、本校の子どもたちが臆することなく、楽しんで活動する姿が見られたことも、この単元で得られた意欲や自信に支えられた成果であると考える。



なかよし交流で
楽しんだいすとりゲーム

(5) 今後の課題

- 単元の中で各児童の目標を設定し、遊びに熱中できていたか、どんな声を出していたか、友だちや先生とどんな関わり方をしたのか等の評価を積み上げていくと同時に、そのための記録をとっていきたい。
- 題材の選定にあたっては、より子どもたちの実態やニーズに合ったものを工夫し、さらに楽しめる活動・意欲的に取り組める活動を展開していきたい。
- 子どもと教師の関わり方や、指導者と補助的指導者の役割については、インリアル的対応を心がけ、コミュニケーションの力を引き出すよう努めたい。
- 行事に向けての大きな流れを大切にしながら、楽しい学習の展開の中で認知の力も意図して養っていきたい。
- 1年生から6年生までの歴年齢を考慮し、クラスでの生活単元学習はもちろん、合同生活単元学習の中でも対応の仕方を工夫していきたい。